

18世紀サンクト・ペテルブルグの都市空間構造に関する研究

正会員 ○ 村岡 大祐 *
同 杉本 俊多 **

サンクト・ペテルブルグ 18世紀 都市図
都市空間構造 水路

1. 序

サンクト・ペテルブルグ¹⁾の都市の始まりは、1703年5月とされる。ピョートル大帝の率いるロシア軍がスウェーデン軍を破り、ネヴァ川河口のニエンシャンツ要塞を陥落させ、さらに川下にペトロパヴロフスク要塞を建設したのがこの時である。その後、1704年にネヴァ川左岸に海軍省を建設し、造船技術を駆使し、軍事国家の急速な形成につとめた。また、1712年には参議会がモスクワから本格的にサンクト・ペテルブルグに移され、軍事、政治あらゆる面での中心地として首都計画が行なわれることとなった。中でも、ピョートル大帝は西欧的な文化に関心を示し、都市の建設においても、オランダやフランスといった西欧の都市計画に興味を示し、その考えのもとに西欧への玄関口として近代的な都市を形成するように指示したとされている。実際の建設にはサンクト・ペテルブルグの初代知事であり、大帝の最大の側近であったメンシコフ公爵が活躍したとされている²⁾。

また、サンクト・ペテルブルグが誕生した17世紀から18世紀にかけては、大航海時代を制したオランダが、舟運によるグローバルなネットワークを形成していた。サンクト・ペテルブルグは西欧への玄関口として、西欧的な都市計画がなされ、中でも、水路を用いたオランダ的な都市計画のもとに、商業、軍事面で隆盛となった。1725年に大帝が死去した後も、その路線が継承され、都市が拡張されていったと考えられる。そして、サンクト・ペテルブルグ建設から半世紀後には大まかな骨格が形成され、ロシア革命時にはペトログラード、レニングラードと名を変更されたが、旧ソ連崩壊後から元のサンクト・ペテルブルグに改名し、今日においても水路網と整然とした街路網を備える都市構造を見せている。

2. 研究の目的と方法

本研究では、18世紀に急速に発展を遂げたサンクト・ペテルブルグの都市構造の変化や、建築空間の変化、街路空間の変化を通して、ネヴァ川を中心とするサンクト・ペテルブルグの都市空間構造を明らかにすることを目的とする。

研究資料として、1698年、1705年、1710年頃、1717年、

1744年、1753年、1776年の都市図を用いた³⁾。これらの図には、基準寸法、方位が記載されており、かなりの精度をもっていると考えられるものもあるが、ある程度のデフォルメがなされているため、詳細で正確な街区や都市空間構成を確認できる1834年の都市図のトレース図面を基に地図資料、絵画等の写真資料とを関連させ、年代ごとの復元平面図を作成した。1753年の地図は詳細な描き込みがなされていて、具体的な敷地割りや建物配置を確認できるので、本研究での都市構造を分析する主たる資料とし、詳細な分析を行った。

3. 18世紀のサンクト・ペテルブルグの都市変遷過程

3.1. 概要

本研究では、そのサンクト・ペテルブルグのネヴァ川付近の河口について詳細に分析を行なっていくことにする。中でも以下の5つの地区に分類し⁴⁾、18世紀のサンクト・ペテルブルグの都市の変遷について年代毎に分析していく。(図1)

- I) アドミラルティー地区
- II) ペテルブルグ島地区
- III) ワシリーエフスキー島地区
- IV) モスクワ側地区
- V) ヴィブルグ地区

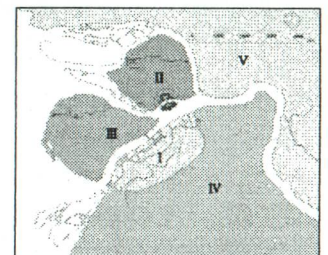


図1 対象地区

18世紀の変遷を5年刻みで、5つの年代に分類することができた。創成期の1700年から1710年を第I期とし、参議会が本格的にペテルブルグに移された1712年を含む1710年から1725年までを第II期、ピョートル大帝が死亡した1725年から1750年までを第III期、半世紀後の1750年から1770年を第IV期とし、1770年から1800年を第V期として考えていく。それぞれの年代について対象地区全域の復元平面図を作成し、より客観的な空間構成の読み込みを行い、年代ごとに体系的に都市構造を分析した。

3.2. 第I期(1700-1710) (図5参照)

1698年の復元図ではヴィブルグ地区にニエンシャンツの要塞とネヴァ川を挟んだ対岸にも要塞が確認できる。これはスウェーデン軍の支配下にあったものであり、その南

北にも集落が見られ、ネヴァ川を挟んで西側には街路が形成されている。また、北側にも計画地が見られ、その周辺に分散的に建物が点在する。

1705年の復元図では、ペトロパヴロフスク要塞、海軍省が建設され、アドミラルティー地区も開発が始まった。ペテルブルグ島の要塞東側にも集落が形成され、海軍省の東側、ペトロパヴロフスク要塞のネヴァ川の対岸に庭園や集落の形成が見られ、河岸沿いを中心に開発が始まる。

3.3. 第Ⅱ期(1710—1725) (図6、図7参照)

1710年頃の地図には、街路があちこちに確認できる。ワシリーエフスキー島は当初はメンシコフ島と呼ばれており、開発当初は西へ延びる街路が確認できる。地図上ではそれは西の森林へ狩猟などに向かう道として、メンシコフ宮殿の裏の庭園から垂直に開発され、これを軸線として、その後の計画が行われていく。また、1710年代にはペテルブルグ島、アドミラルティー、モスクワ側地区では河岸を中心に分散的に計画が行われたと考えることができる。

1717年にはモスクワ側地区のアレクサンドル・ネフスキー修道院と海軍省を結ぶネフスキー大通りが完成し、海軍省を中心とする骨格が現れる。これは、ピョートル大帝が海軍省をノブゴロド—モスクワ通りに繋いで、西側のもう一本の通りと共に、バロッキングな景観デザインを施そうとしたことの表れである。

ワシリーエフスキー島地区では、碁盤目の街区計画が見られるが、これは未だ計画案に過ぎない。それは特に、初期の計画ではオランダ人シモン・ステヴィンの理想都市計画案(1590年の制作とされる)に似て、水路網が主となっていた。2本の水路の間に2本の道路を挟んで3列の街区をつくるといった共通したアイデアも見られる。周囲に教会を配し、その中に水路を巡らすことで、市民のための街区計画が行なわれている。

3.4. 第Ⅲ期(1725—1750) (図8参照)

1744年ではフォンタンカ川の外側まで住宅地や庭園が形成され、海軍省、ネヴァ河岸を中心に1717年からの計画が拡大していったと考えられるが、ネヴァ川から離れた地区では未開発地区が多く見られる。ペテルブルグ島地区では、街区が自然発生的にできていると考えられるが、西側では河川に対して垂直に街路が引かれるといった構造をとっていると考えられる。また、ワシリーエフスキー島の西端では入り江が作られ、大型船が繫留されて、交易に使われたと考えることができる。モスクワ側地区、ヴィブルグ地区ではネヴァ川沿いやフォンタンカ川に沿った辺りで市街化が進行してきている。

3.5. 第Ⅳ期(1750—1770) (図9参照)

1753年ではフォンタンカ川の外周部やヴィブルグ地区、ペテルブルグ島地区の北側でバラックが計画され、住居地域の住み分けを明確に見ることができる。アドミラルティー地区では放射状の3本目の大きな通りができ、海軍省を

中心として外部にバロッキングな街路デザインが完成する。また、グリボエードフ運河が掘削されることで、モイカ川、フォンタンカ川を含め3つの河川、水路で囲まれる、阿姆斯特ダムに似た構造をとることにもなる。

3.6. 第Ⅴ期(1770—1800) (図10参照)

1776年ではモスクワ側地区の外の水路が完成し、同心円状の都市構造を明確に見ることができる。ワシリーエフスキー島地区では格子状の水路が一部埋め立てられ、街路に転換されたが、町割りはそのまま利用され、都市が形成されていった。ワシリーエフスキー島地区の西側やアドミラルティー地区の西側でも水路を巡らして新しい地区が形成されている。ペテルブルグ島地区では要塞を中心とする明確なバロッキングな街路に改変され、幾何学的な都市構造を成している。

4. 各地区の空間構成

4.1. 序

3章に述べたように、18世紀を通して都市が形成されていったが、特に18世紀半ばには大まかな街路と水路の骨格が完成していたと考えることができる。ここでは、詳細な情報を汲み取れる1753年の地図を正確な寸法に復元した復元図を用いて、街区ごとに、18世紀半ばの都市構造を詳細に分析する。特に、幾何学的に重要な都市構造を含むと考えられる3つの地区について詳細に分析した。海軍省のあるアドミラルティー地区(一部外部のモスクワ側も含む)、ペトロパヴロフスク要塞の北側のペテルブルグ島地区、その明確なグリッドが見られた、ワシリーエフスキー島地区の3つである。

4.2. アドミラルティー地区 (図2参照)

4.2.1. 全体空間構成

アドミラルティー地区は海軍省を中心に、放射状に3本の街路が伸びたバロッキングな都市計画と、海軍省に近い側から、モイカ川、グリボエードフ運河、フォンタンカ川といった3つの河川と運河に沿って建築物や庭園が同心円状に構築される都市計画が合わさった地区である。

4.2.2. 街区構成

- ①ネヴァ川とモイカ川の間では、ネヴァ川に沿って上流貴族の住居である宮殿、庭園や軍事施設などが存在する。
- ②モイカ川とグリボエードフ運河の間では庭付きの住居や庭園、教会などが見られる。
- ③グリボエードフ運河とフォンタンカ川の間では、同様に庭付きの住居、庭園、教会、市場が見られ、先ほどの内側の地区よりも下級の貴族の居住区と考えられる。
- ④以南のモスクワ側地区では川沿いの庭園や住居を挟んで、整然と計画されたバラックが広がる。また、東側のネヴァ河岸には、上流貴族の住居と考えられる宮殿が多く見られ、内陸に入るにしたがって、戸建の住居やバラックが形成されている。

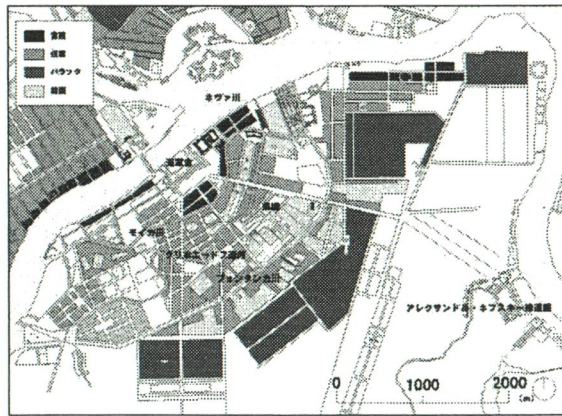


図2 アドミラルティー地区

4.3. ペテルブルグ島地区 (図3参照)

4.3.1. 全体空間構成

ペテルブルグ島地区はペトロパヴロフスク要塞から放射状に広場を作り、東側では自然発生的に、西側では河川に対して垂直に計画的に街路が形成されたと推測できる。

4.3.2. 街区構成

- ①要塞から半円形状に広がった広場の向いに市場が見られ、周囲に教会が点在し、居住地区が形成されている。
- ②後背部には計画的に構築されたバラックやカールポフカ川に沿って、河川と居住地区との緩衝地帯として庭園が計画されている。
- ③西側には税関、対岸の島に市場があり、ジュダーノフカ運河を通して物品が供給されたと推測できる。

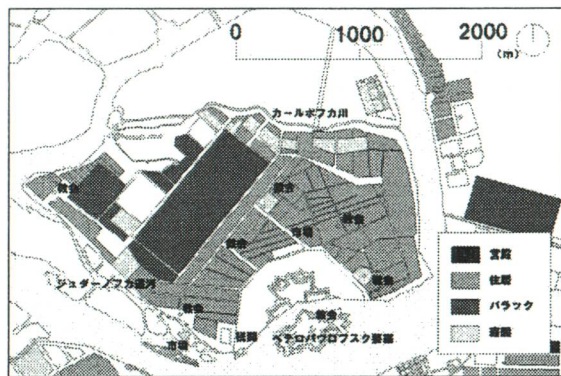


図3 ペテルブルグ島地区

4.4. ワシリーエフスキー島地区 (図4参照)

4.4.1. 全体空間構成

ワシリーエフスキー島地区は、島内部は明確なグリッド状に街路と水路を通した地区で、典型的な町屋型の街区構成を見ることができる。ネヴァ川に対しても、垂直となるように計画的に水路(幅8~9m)が引かれ、機能的な構造となっている。後に埋め立てられることになったが、その後も南側に通る大きな通りはポリショイ(大)通りとしてワシリーエフスキー島の中心街路として機能していく。

4.4.2. 街区構成

- ①東側は参議会などの政府機関が存在し、河岸には証券取引所と税関が見られ、島東部に中心施設が存在する。
- ②南の河岸沿いには海兵隊の青年貴族、士官学校生徒の軍隊の施設など、貴族、軍事関係の施設や邸宅が見られる。
- ③西端には入り江が存在し、倉庫群と一部の将校や水夫の居住区が確認できる。ここを拠点として、国内外との交易が行われていたと考えられる。

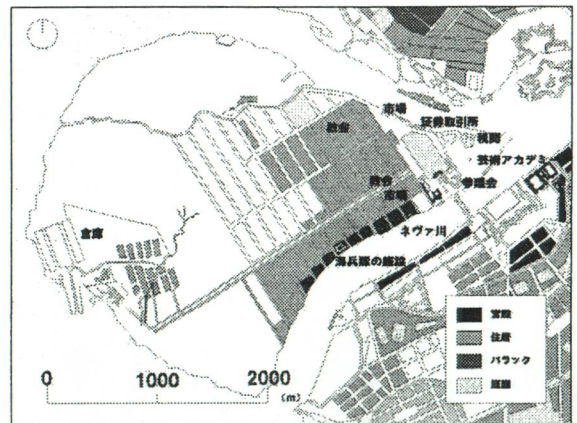


図4 ワシリーエフスキー島地区

5. 結

本研究によって、立地については、ネヴァ川岸やデルタ地帯に中心施設を立地させて、海運や浮き橋によってそれぞれがリンクする包括的な計画となっていること。計画については、海軍省や要塞を中心とするバロック的なデザインとワシリーエフスキー島のグリッドプランといった明確な軸線街路の計画性が見られた。その一方で、湾曲した河川や運河の周りに、街区を形成する非計画性のもとにも都市が形成されたことが明らかとなった。

註

*地区分類図、復元平面図については筆者作成。

- 1) サント・ペテルブルグとはドイツ語で聖ペトロの街の意。建都を命じたピョートル大帝(名前がラテン語でペトロス)が自分と同名の聖人ペテロの名にちなんで付けたとされている。
- 2) サント・ペテルブルグの都市史に関しては、主に以下を参照した。
 - ・ James Cracraft(1988)『THE PETRINE REVOLUTION IN RUSSIAN ARCHITECTURE』Chicago: The University of Chicago The University of Chicago Press
 - ・ 土肥恒之(1992)『ピョートル大帝とその時代 サンクト・ペテルブルグ誕生』東京: 中公新書
 - ・ 小町文雄(2006)『サンクト・ペテルブルグ よみがえった幻想都市』東京: 中公新書
- 3) 復元に用いた都市図は主に The Hebrew University of Jerusalem & The Jewish National & University Library, The Military Archives of Sweden 所蔵のHP 公開デジタルマップ等を用いた。1698年、1705年の地図に関しては <http://www.klad.hobby.ru/index.htm> から引用した。また、それぞれの都市図の作者は以下になっている。
 - 1698年: スウェーデン人、Avraam Cronjort によって制作
 - 1705年、1710年頃: 作者不明
 - 1718年: Johann Baptistus Homann によって制作
 - 1744年: 地理学者、Matthaeum Seutter によって制作
 - 1753年: P. F. Tardieu によって制作
 - 1776年: C. M. Roth によって制作
 - 1834年: Baddwin, Cradoekらによって制作
- 4) 時代によって地区名は異なるが、ここでは1744年の都市図(ドイツ語表記)に記載されていたものを参考にした。

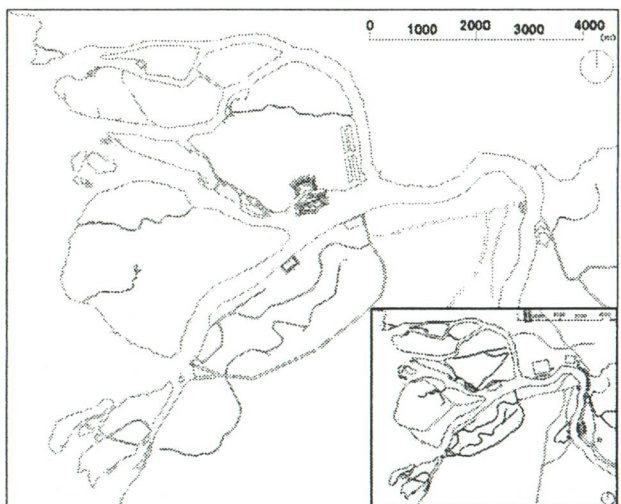


図5 1705年復元図(右下1698年復元図)

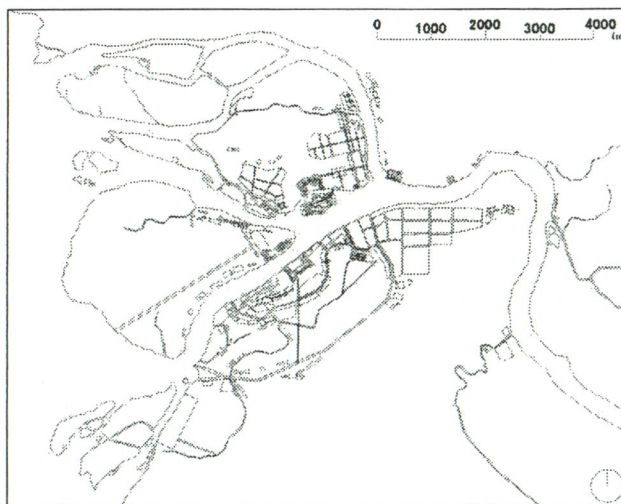


図6 1710年頃復元図

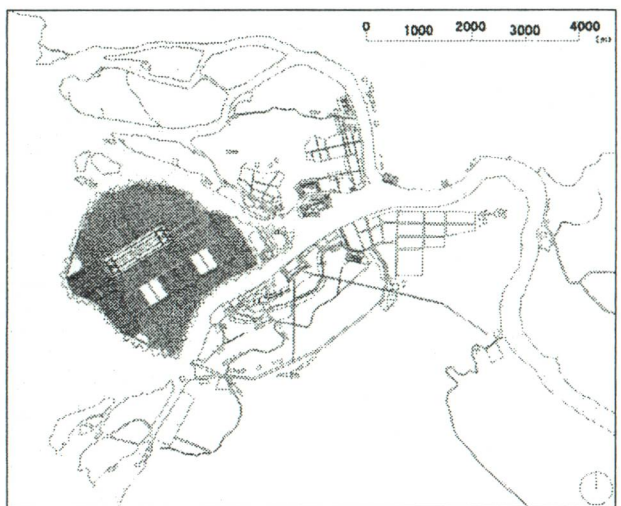


図7 1717年復元図

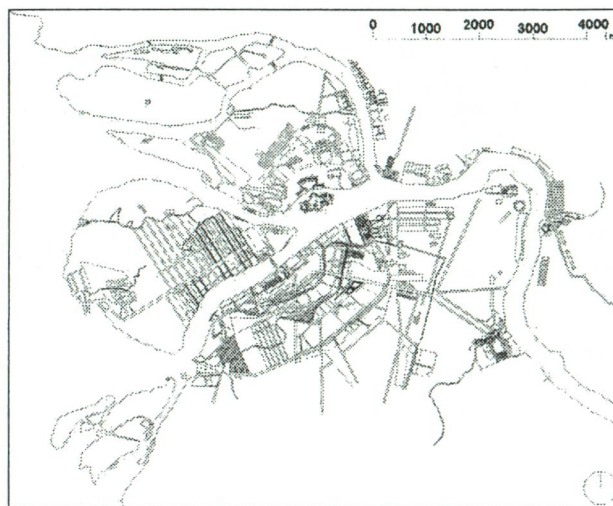


図8 1744年復元図

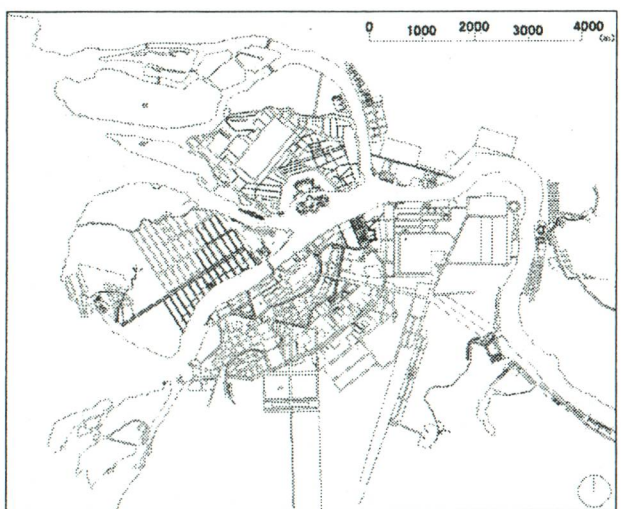


図9 1753年復元図

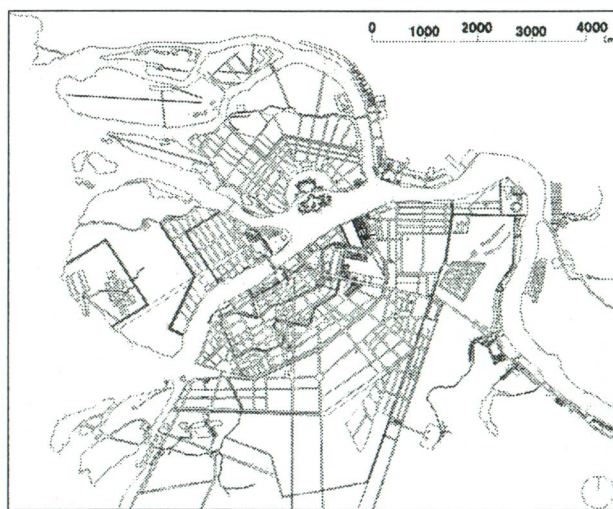


図10 1776年復元図

* 広島大学大学院工学研究科 博士課程前期
 ** 広島大学大学院工学研究科 教授・工学博士

* Graduate School of Engineering, Hiroshima Univ.
 ** Prof. Graduate School of Engineering, Hiroshima Univ. Dr. Eng.